

第18回新しい資本主義実現会議提出資料

令和5年5月16日

(株)シナモン 代表取締役 Co-CEO 平野未来

本日提示された三位一体労働市場改革の指針（案）は、戦後確立され日本の高度成長を支えた労働システムを更新する大胆なもので、本会議の具体的成果として新しい資本主義実行計画更新における柱となりうると考える。すでに十分に大胆かつ調整が行われている指針の内容自体よりも現実的運用時の視点や戦略について追加でコメントさせていただきたい。

1. 三位一体労働市場改革の指針具体化におけるOODAループの活用

OODA ループは、状況認識や意思決定を迅速かつ効果的に行うために、4つの要素、観察（Observe）指向（Orient）決定（Decide）行動（Act）を繰り返すプロセスである。一般的に広く普及しているPDCAサイクルとの違いは、迅速な状況認識と適応性に重点を置いている点である。一方PDCAサイクルは計画的で体系的な改善を目指しており急激な環境変化にはOODAループが適している。詳しくは添付資料を参照いただきたい。

三位一体労働市場改革の指針（案）においても「改革には時間を要するものも含まれることから、一定期間ごとに官民でその進捗を確認し、時間軸を共有しながら、計画的に見直しを行っていく。」との、記述があり、その見直しの際にOODAループの思想を活用することを提案したい。変化が激しいVUCA環境下においてはOODAループは適切な思想であ

り、また、OODAループの始点である指向（Orient）ではMTP（Massive Transformative Purpose）と呼ばれる「最低30年以上先に実現する現状とは全く異なる世界観」が重要であるが、日本の労働のあり方を根本的に変革するという目標は十分大きなものであり、OODAループを駆動するのにふさわしい迫力を有していると考えます。また、政府としてもOODAループを使いこなせることにより、環境変化に強い強靱＝レジリエントな社会創造に寄与するのではないだろうか。

2. 三位一体労働市場改革の指針のより積極的な広報

本会議も設置後1年半が経とうとしているが、毎回大変充実した議論がなされ、スタートアップ5か年計画や資産職得倍増プラン、本指針などの具体的政策のみならず、生成系AIへの取り組み方向性の議論など、大変多くの成果が出ていると感じている。積極的な広報で高い認知度を獲得しつつメディアからの評価も受けているが、これらの成果の内容はかつてなかったレベルのもので、社会を大きく変えうる、まさにMTPレベルを標榜した大胆なものであり、大きく日本の内外において喧伝されるべきものであるのではないだろうか。三位一体労働市場改革の指針が合意されたタイミングでの対応省庁も巻き込んだ広報も一案であろう。

以上、今週G7サミットも広島で開催されることもあり、日本が新しい資本主義の実現に向けて着実に歩んでいることを内外に再確認できることを希望し本日のコメントとしたい。

以上

<p>Observe (観察)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 見える化 • 何を「見える化」して、何は見えなくて良いのか • 「見える情報」の一部は、直近の業務だけではなくパーパスと強く紐づいている必要がある • データの取得はできるだけ自動化
<p>Orient (指向)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Orient の統一にパーパスが必要 • 計画思考でパーパスを捉えてしまうと、「パーパスのために、何の行動をするか」というマイルストーン設定になってしまい、大きなパーパスを設定できない • MTP(Massive Transformative Purpose)を多くの角度からイメージーションを加えていくことで世界観を確立し、没入できるようにするのが重要 • センスメイキングを用いて現状の認識と未来の指向性を結びつけることで、組織全体に明確な方向性を示す
<p>Decide (決定)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Decide の自律分散組織 • 心理的安全性 • ランダム性の挿入
<p>Act (実行)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • フットワークの軽さ <p>フットワークが重いときは：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)環境の不備 2)マスト業務によるリソースのひっ迫⇒自動化 3)優先度の不明瞭さ 4)サンクコストの認知バイアス 5)リソース再配置の柔軟性